

- 1 宗教とは何か
- 2 近代世界と宗教 - なぜ宗教か -
- 3 宗教的多元性の諸問題

Exkurs 日韓キリスト教神学と土着化 - 民族をめぐって -

(1) 宗教的多元性の諸問題 東アジアのキリスト教の比較研究

1 はじめに

1. 多元的世界の様々な領域において顕在化している対立構造と、それらに対して形成が期待される寛容性について。とくに、東アジア、宗教、民族、公共性といった問題領域。

2 宗教的多元性の諸問題 対話の意義

2. キリスト教思想における宗教的多元性をめぐる議論（芦名、1994）

現代の宗教的多元性の状況が単なる過渡的な現象ではなく、むしろキリスト教思想の本質に関わる問題であること、また多元性と様々なリンクした対立と相克の現実に対処するには宗教間対話などによる宗教間の相互理解・連帯・寛容性の促進が不可欠であること

3. 「対話」に対する批判。藤原聖子「空転する「対話」メタファー」

「宗教間対話論の一番の欠点は、解決すべき問題の認識とその対処法としての理論、つまり目的と手段がマッチしていない、という非常に基本的なところにある」（藤原、2001、127頁）。

「宗教者の中には対話をすること自体に価値を置かない者がいて、そのような他者の存在が、宗教間対話論では最初に取り組むべき問題なのである」（同書、132頁）。

「『対話』の比喻の問題は、対話主体の双方が、最初から同等の位置にあり、同様に働きかけを相互に行うという想定にある。この前提は誤りであるし、なおかつ『対話』の言葉は宗教学の領域を回復するにはあまりに脆弱なスローガンであると筆者は考えるのである」（同書、136頁）、「宗教学では『対話』よりも『批判』としての比較を行い、それによりただ地域研究の成果や批判派の議論を受け売りするのではなく、それらと刺激的な関係を築くという道」（同書、139頁）。

4. 宗教間対話と言う場合の「対話」の内実についての理解、対話の役割を限界。

自己理解と他者理解の場の一つとしての対話 「『批判』としての比較」（同書、139頁）に対する一定の寄与。

3 東アジア・キリスト教の比較研究

5. 宗教的多元性が問われている具体的な場にもどって、いわば現場から議論を組み立て直すこと。東アジアのキリスト教の比較研究という視点から議論。

6. 東アジア・キリスト教の宗教状況と近代化（東アジアの共通状況）
 民族主義との関わりから見た、日本、韓国、中国におけるキリスト教の多様性
 キリスト教は民族主義といかなる関わりを構築しうるか。民族主義との断絶か、民族主義への同化か、あるいは拒否か。
 寛容の場としての公共性と東アジアにおける宗教間対話の意義。
 これらの内、 と は東アジアの宗教状況とキリスト教の多様性という東アジアにおけるキリスト教の比較研究の前提となる事柄 芦名（2007）
7. 東アジアのキリスト教にとって、宗教的多元性は、民族主義との関わりにおいて先鋭的な仕方でも問題化する。キリスト教と日本的な伝統文化や民族精神（その中心に日本的宗教性なるものが位置付けられる）との異質性、対立性という議論。
 全日本仏教会（教育基本法第九条（宗教教育の条項）の改正を求める理事長名で書かれた要望書）の主張、「日本の伝統・文化の形成に寄与してきた宗教に関する基本的知識及び意義は、教育上これを重視しなければならない」における「日本の伝統・文化の形成に寄与してきた宗教」とは？
8. 韓国キリスト教の状況。韓国の伝統へ受容され、民族主義と密接な関わり合いを形成している。現代中国のキリスト教の場合との比較。
9. 公共性の問題としての宗教的多元性と寛容。公共性は、「特定の誰かにではなく、すべての人々に共通のもの(common)という意味」(齋藤、2000、ix 頁)を含意しており、国民国家における「共通のもの」とは、民族性、国民性といった仕方で表象されるものに他ならない。
10. 競合する複数の宗教が公共性のレベルにおいて「民族」「民族精神」を具体的に構築すること 「愛国とは何か」といった問題にも関わる において、いかに相互に関わり得るかが問われねばならない。
 宗教間対話：公共性のレベルでの討論と実践という観点からの再検討が必要。
11. 伝統的な政教分離論が前提とする公私二分法に対して、いわば公と私を媒介する公共圏（公共性のレベル）を下から構築するという仕方で、民族主義あるいは他の諸宗教との相互交流の場を形成するという課題。

4 むすび

<文献>

芦名定道（1994）『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。

（2007）「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『対話と寛容の知を求めて 人文学の未来』（下巻 『新たな人類知を求めて』）京都大学学術出版会（刊行予定）。

小坂井敏晶（2002）『民族という虚構』東京大学出版会。

齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店。

高橋哲哉（2004）『教育と国家』講談社現代新書。

藤原聖子（2001）「空転する「対話」メタファー」、『宗教研究 特集：近代・ポスト近代と宗教的多元性』（日本宗教学会）第75巻 - 329、123-148頁。

(2) 日韓キリスト教神学と土着化 民族をめぐって

1 問題

1. キリスト教の「土着化」について、宗教学あるいはキリスト教思想研究という立場からアプローチすること。
2. キリスト教の「自己同一性と状況適応性」(モルトマン)という両極構造
土着化の失敗例：状況に過剰適応して自らの固有性(自己同一性)を失う場合と、固定化された自己同一性に過剰に固執することによって状況への適応が果たされない場合 両極構造に基づくダイナミズム(生命力)を喪失、土着化の失敗。
3. 東アジアのキリスト教の土着化は、民族あるいは民族主義との関係から問われねばならない。
4. 「民族」:「自然と文化」「古代と近代」という二つの軸。
「自然と文化」:自然のつながり(血縁と地縁)は民族成立の必要条件、しかし、十分条件ではない。民族が誕生するには、実体としては自然のつながりが存在しないところに「社会的想像力」その表現が民族起源神話であるが作用し、民族意識を生じさせる必要がある。「民族」は文化的幻想に他ならない(虚構としての民族)。
「古代と近代」:民族とは古代から存在し、また民族の正統性はその古さに訴えることによって主張される。しかし、現代において問題になる民族(民族意識、民族主義)は、18世紀の西欧における国民国家の理念に規定されたものである。

2 日韓キリスト教の比較 民族、民族主義との関わりにおいて

5. 日韓両国におけるキリスト教の大きな相違、とくに信徒数に関する相違：
日本：キリスト教信徒の数は全人口の1%前後 文化庁編『宗教年鑑 平成17年度版』によれば、2004年12月31日現在で、日本の総宗教信者数213、826、661人中、キリスト教系は、2、161、707人(全体の1.2%)。
韓国：2005年11月1日現在、キリスト教信徒数は、全人口47、278、952人の29.2%(プロテスタントが18.3%、カトリックが10.9%)である 2006年5月25日発表の「2005年度人口住宅総調査」(韓国政府統計庁)。
6. 日本：数的に見れば、日本においてキリスト教の土着化は成功したとは言いがたい(しかしその一方で、キリスト教は、全人口に占める小さな割合に比較して、明治以降の教育・医療・福祉において相対的に大きな影響を及ぼしつつ、現在に至っており、その社会的な存在意味は、信徒数によって単純に判断することはできない)。
明治中期、とくに日露戦争(1904年)から現在に至る日本の政治状況、明治以降の日本国家が選択した近代化のあり方。近代日本における民族主義との軋轢。
日本におけるキリスト教は、明治以降現在に至るまで、近代日本の民族主義との緊張関係の内に、つまり、一方で、民族主義の圧力の下で圧迫を受け、他方では、民族的伝統的な事柄との距離を意識的に取りつつ存在してきた。基本的にキリスト教は「日本的なもの」の外部あるいは周辺に存在してきた。
7. 韓国：韓国キリスト教が第二次世界大戦終結までの抗日運動と戦後の民主化運動に対

して積極的に関与した。民族主義自体の構成要素の一つとなった。

韓国のキリスト教会が、公（政府、地方自治体など）の社会福祉の不備を積極的に補完することによって、韓国社会にその働きを認知されるにいたっている。

- 8．日本のキリスト教の土着化の問題点は、状況適応性にある。それに対して、韓国のキリスト教では、民族主義への同化がある一線を超えて、過剰適応となる時、キリスト教としての自己同一性（たとえば、民族的なものを超越する正義の普遍性）を喪失する恐れがある。

3 内村鑑三と愛国心

- 9．自己同一性を失わず、民族的状況に埋没することなく、キリスト教は民族と民族主義とにどのように向かい合うことができるのであろうか。

- 10．内村鑑三：同時代の民族主義としばしば軋轢を起こす。しかし、内村は、キリスト者でありつつも、生涯日本を愛することをやめなかった、その点で、愛国者、民族主義者だったのである。

「二つの J」(Jesus と Japan の二つへの愛):「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」(1885 年、新島襄宛の手紙)

- 11．内村が非戦論を唱えるようになった経緯

日清戦争は東洋の近代化のための義戦である(『日本人の天職』(1892 年))

「日清戦争の目的如何」(1894 年))

「<義戦>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<正義>を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」(アメリカの友人ベル宛の書簡)

「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」(「戦争廃止論」)

- 12．問題は、「国あるいは民族を愛する」という場合の「愛」の意味、つまり、愛国とは何か、ということに他ならない。

- 13．「イエス」と「日本」の関係。「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」。「日本」が道を誤ったときに、キリスト者は、「イエス」「神」という視点からそれを批判する義務(批判原理としての宗教) 「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉍毒地巡遊記」)。

- 14．現実の逸脱した形態と本来の目ざすべき形態という民族主義の二重化。内村の理想とした国家は経済大国や軍事大国ではなく、農業を中心とした非軍事的な小国であった。

「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えませんが、否な、其の正反対が事実であります」、「国の實力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」(「デンマルク国の話」『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫)

15. 「聖書研究」によって学んだ古代イスラエルの預言者の思想と生き方。
16. 自民族中心主義・排他主義はその逸脱・歪みの典型であり、逸脱した実体原理は修正と批判を必要とする。内村にとって、間違った近代化を推進しつつある民族主義を批判することは、まさに真の愛国と同一の事柄だったのである。内村は、こうした実体原理と批判原理との統合の原型を、古代イスラエルの預言者に見いだした。

4 展望

17. 適切な仕方です着化できないキリスト教は、逸脱した民族を批判するというその本来の役割を有効に果たすことができない。批判を可能にする場。宗教外の諸勢力 場合によっては無神論的と呼ばれる者たちとも との連帯における「批判の土着化」。

<文献>

1. 民族について

- ・蓮實重彦・山内昌之編 『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。
- ・小熊英二 『単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜』新曜社、1995年。
- ・小坂井敏晶 『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。

2. 東アジアという問題設定について

- ・宮嶋博史・李成市他編 『植民地近代の視座 朝鮮と日本』岩波書店、2004年。
宮嶋博史「東アジアにおける近代化、植民地化をどう捉えるか」
李 榮薫「民族史から文明史への転換のために」

3. キリスト教思想と土着化・民族

- ・Jurgen Moltmann、 *Der gekreuzigte Gott*, Chr. Kaiser 1972.
I. Identität und Relevanz des Glaubens, S. 12-33.
- ・Paul Tillich、 *Die sozialistische Entscheidung* 1933、 in: *Main Works · Hauptwerke* 3、 de Gruyter、 1998.
- ・芦名定道 「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『対話と寛容の知を求めて 人文学の未来』(下巻 『新たな人類知を求めて』) 京都大学 学術出版、2007年(予定)。
「ティリッヒと宗教社会主義」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第11号、2007年(予定)。

4. 日本のキリスト教、とくに内村鑑三

- ・土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
- ・宮田光雄 『平和の思想史的研究』創文社、1978年。
- ・関根正雄編著 『内村鑑三』清水書院、1967年。
- ・『内村鑑三全集』岩波書店。
- ・鈴木範久監修、藤田豊編 『内村鑑三著作・研究目録』教文館、2003年。
- ・芦名定道 「第5章 民族主義と平和、第3講 思想」、芦名定道・土井健司・辻学 『現代を生きるキリスト教』(改訂新版) 教文館、2004年、226-232頁。